# 〔B 年〕聖霊降臨節第 4 主日(2026 年 6 月 10 日)

**【旧約聖書日課】サムエル記上　16章14～23節**

14主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼を
さいなむようになった。15サウルの家臣はサウルに勧
めた。「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう。
16王様、御前に仕えるこの僕どもにお命じになり、竪琴
を上手に奏でる者を探させてください。神からの悪霊
が王様を襲うとき、おそばで彼の奏でる竪琴が王様の
御気分を良くするでしょう。」17サウルは家臣に命じた。
「わたしのために竪琴の名手を見つけ出して、連れて
来なさい。」18従者の一人が答えた。「わたしが会った
ベツレヘムの人エッサイの息子は竪琴を巧みに奏でる
うえに、勇敢な戦士で、戦術の心得もあり、しかも、言
葉に分別があって外見も良く、まさに主が共におられ
る人です。」19サウルは、エッサイに使者を立てて言っ
た。「あなたの息子で、羊の番をするダビデを、わたし
のもとによこしなさい。」20エッサイは、パンを積んだ
ろばとぶどう酒の入った革袋と子山羊一匹を用意し、
息子ダビデに持たせてサウルに送った。21ダビデはサ
ウルのもとに来て、彼に仕えた。王はダビデが大層気
に入り、王の武器を持つ者に取り立てた。22サウルはエ
ッサイに言い送った。「ダビデをわたしに仕えさせる
ように。彼は、わたしの心に適った。」23神の霊がサウ
ルを襲うたびに、ダビデが傍らで竪琴を奏でると、サ
ウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れ
た。

**【使徒書日課】使徒言行録　16章16～24節**

16わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に
取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占い
をして主人たちに多くの利益を得させていた。17彼女
は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶ
のであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さ
んに救いの道を宣べ伝えているのです。」18彼女がこん
なことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて
振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名に
よって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、
霊が彼女から出て行った。19ところが、この女の主人た
ちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知
り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために
広場へ引き立てて行った。20そして、二人を高官たちに
引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、
わたしたちの町を混乱させております。21ローマ帝国
の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行す
ることも許されない風習を宣伝しております。」22群衆
も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二
人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。23そして、
何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳
重に見張るように命じた。24この命令を受けた看守は、
二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をは
めておいた。

**【福音書日課】マルコによる福音書　5章1～20節**

1一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。
2イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取り
つかれた人が墓場からやって来た。3この人は墓場を住
まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつな
ぎとめておくことはできなかった。4これまでにも度々
足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いて
しまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったの
である。5彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分
を打ちたたいたりしていた。6イエスを遠くから見ると、
走り寄ってひれ伏し、7大声で叫んだ。「いと高き神の
子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめな
いでほしい。」8イエスが、「汚れた霊、この人から出
て行け」と言われたからである。9そこで、イエスが、
「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギ
オン。大勢だから」と言った。10そして、自分たちをこ
の地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに
願った。11ところで、その辺りの山で豚の大群がえさ
をあさっていた。12汚れた霊どもはイエスに、「豚の中
に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13イエスが
お許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に
入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って
湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14豚
飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。
人々は何が起こったのかと見に来た。15彼らはイエス
のところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が
服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしく
なった。16成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取り
つかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語
った。17そこで、人々はイエスにその地方から出て行
ってもらいたいと言いだした。18イエスが舟に乗られ
ると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたい
と願った。19イエスはそれを許さないで、こう言われ
た。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主が
あなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをこと
ごとく知らせなさい。」20その人は立ち去り、イエスが
自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地
方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

## サムエル記上　16章14～23節

14主の霊はサウルから離れて、主からの悪い霊
が彼をさいなむようになった。15サウルの僕たち
は彼に言った。「御覧ください。あなたをさいな
むのは神からの悪い霊です。16*王様〔直訳→我ら*
*の主〕*、どうか御前に仕える僕どもに命じて、琴
を弾くのが巧みな者を探させてください。神から
の悪い霊があなたを襲うとき、その者が琴を奏で
れば、あなたの気分をよくなるでしょう。」17サ
ウルは家来たちに言った。「琴の名手を見つけ出
し、ここに連れて来てくれ。」18従者の一人が答
えた。「申し上げます。私はベツレヘム人エッサ
イの息子に会ったことがありますが、彼は琴を弾
くのが巧みで、力ある勇士でもあり、戦士でもあ
ります。しかも、聡明で容姿に優れ、主が彼と共
におられます。」19そこでサウルはエッサイのも
とに使者を遣わして言った。「あなたの息子で、
羊の番をするダビデを私のもとによこしなさい。」
20エッサイはパンを積んだろばとぶどう酒の入っ
た革袋、それに子山羊一匹を用意し、息子ダビデ
に持たせ、サウルに送った。21ダビデはサウルの
もとに来て、彼に仕えた。サウルはダビデが非常
に気に入り、自分の武器を持つ従者とした。22サ
ウルはエッサイに人を遣わして言った。「ダビデ
を私に仕えさせてほしい。彼は私の目に適った。」
23神の霊がサウルを襲う度に、ダビデは琴を手に
して爪弾いた。するとサウルの霊は休まり、良く
なって、悪い霊は彼を離れた。

## 使徒言行録　16章16～24節

16私たちは、祈りの場に行く途中、占いの霊に
取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、
占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。
17彼女は、パウロや私たちの後ろに付いて来て
こう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高
き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えている
のです。」18彼女がこんなことを幾日も繰り返す
ので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に
言った。「イエス・キリストの名によって命じる。
この女から出て行け。」すると、霊は即座に彼女
から出て行った。

19ところが、この女の主人たちは、金儲けの望
みがなくなってしまったことを知り、パウロとシ
ラスを捕らえ、広場の役人のところに引き立てて
行った。20そして、二人を*高官〔別訳→二人委員〕*
の前に引き出してこう言った。「この者たちはユ
ダヤ人で、私たちの町を混乱させております。21
ローマ人である私たちが受け入れることも、行う
ことも許されない風習を宣伝しているのです。」
22群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高
官たちは、二人の衣服を剥ぎ取り、鞭で打つよう
に命じた。23そして、何度も鞭で打ってから二人
を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じた。
24この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の
牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

## マルコによる福音書　5章1～20節

1一行は、*湖〔直訳→海〕*の向こう岸にあるゲラ
サ人の地方に着いた。2イエスが舟から上がられ
るとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場か
ら出て来て、イエスに会った。3この人は墓場を住
みかとしており、もはや誰も、鎖を用いてさえつ
なぎ止めておくことはできなかった。4度々足枷
や鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり足枷を砕く
ので、誰も彼を押さえつけることができなかった
のである。5彼は夜も昼も墓場や山で叫び続け、石
で自分の体を傷つけたりしていた。6イエスを遠
くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7「いと高き
神の子イエス、*構わないでくれ〔直訳→私とあな*
*たとの間に何の関りがあるのか〕*。後生だから、
苦しめないでほしい」と大声で叫んだ。8イエスが、
「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたか
らである。9イエスが、「名は何というのか」とお
尋ねになると、「名はレギオン。我々は大勢だか
ら」と答えた。10そして、自分たちをこの地方か
ら追い出さないようにと、しきりに願った。

11ところで、その辺りの山に豚の大群が飼って
あった。12汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に
送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13イエ
スがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、
豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れ
は、崖を下って湖になだれ込み、湖の中で溺れ死
んだ。14豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのこ
とを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来
た。15そして、イエスのところに来ると、レギオ
ンに取りつかれていた人が服を着、正気になって
座っているのを見て、恐ろしくなった。16成り行
きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人に
起こったことや豚のことを人々に語って聞かせ
た。17そこで、人々はイエスにその地方から出て
行ってもらいたいと願い始めた。18イエスが舟に
乗ろうとされると、悪霊に取りつかれていた人が、
お供をしたいと願った。19しかし、イエスはそれ
を許さないで、こう言われた。「自分の家族のも
とに帰って、主があなたにしてくださったこと、
また、あなたを憐れんでくださったことを、とこ
ごとく知らせなさい。」20そこで、彼は立ち去り、
イエスが自分にしてくださったことを、ことごと
くデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚
いた。

## 黙想のためのノート

### 次主日の教会暦と聖書日課

・6 月 14 日「聖霊降臨節第 4 主日」の日課主題は「悪霊追放」。

・旧約日課は、「サムエル記上」から、ダビデが竪琴の名手としてサウル王に仕えるようになったという逸話を物語る説話箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、フィリピ伝道においてパウロが女奴隷から占いの霊を追い出したことで起こった出来事を伝える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、ゲラサの地で汚れた霊を追放されたという逸話を伝える説話箇所。

### 旧約日課（サムエル上 16 章より）

・「サムエル記」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）の区分で「前の預言者」の第三に位置する歴史物語文書。本書は、カナン地方定住時代を「イスラエル正史物語」として描く「前の預言者」全 4 巻の中で、イスラエルおよびユダにサウル王、次いでダビデ王が立てられていった王国草創期を物語る。上下二巻に分けて扱われ、上巻はサウル王の時代まで、下巻はダビデがサウル王没後にユダおよびイスラエルの王として統治した時代を描く。本書では、ユダ（ユダ族）とイスラエル（サウルを王に立てた諸部族連合）を明確に区別して扱っており、サウルを王に戴くイスラエルに対して、ユダは王を立てない一部族としてサウルの王国に従属していた集団として描かれている。ユダ族が「王」を立てるのは、サウル王の死後、イスラエル王国が王位継承を巡って不安定になる中でのことで、ダビデはユダの王としてイスラエルの王権をサウル王家から簒奪した、と描かれる。ただし、この王権簒奪の経緯は、イスラエルを構成する諸部族がサウル亡き後のサウル王家を見限ってユダ王ダビデの傘下に入ったものとして描かれ、王権を失ったサウル王家もまたダビデ王権の傘下に入った臣下として描かれる。サウル王家の母体であるベニヤミン族は、後の南北王国時代には一貫してユダ族と共に南王国ユダを構成する部族として描かれており、かつてサウル王のもとに集結したイスラエル諸部族がサウル王没後にサウル王家を見限ったときに、サウル王家の下にあるベニヤミン族がユダ族の指導者だったダビデの保護下に入り、ダビデを王とする二部族連合王国を形成した、ということが史実の核心かもしれない。

・日課箇所は、サウル王の統治時代、ダビデが表舞台に登場してくる経緯を伝える一連の逸話の一つ。悪霊にさいなまれるようになったサウル王が、悪霊の苛みを逃れようと探し出させた竪琴の名手がダビデであったと描かれる。本書は、前段で、預言者サムエルがエッサイの息子らの中からダビデを見いだして油を注ぎ、将来の王即位を示唆したという逸話を物語っているが、その場面は密かに私的な場でなされた出来事として描かれており、ダビデはいまだサウル王をはじめとする公的な場では知られていない存在のままに留められていた。

・竪琴の名手とされるダビデは、旧新約正典で一貫して詩編作家とみなされている。「詩編」には、「ダビデの歌」の標題が付されている詩が 73 例ある。

### 使徒書日課（使徒 16 章より）

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として編纂された「初代教会正史物語」を描く歴史物語文書。概説は、資料「聖書と祈りの会 260520」など参照。

・日課箇所は、シリア・アンティオキアの教会が派遣したバルナバ宣教団の一員であったパウロが、バルナバらとの意見の相違から宣教団を離れ、独自の宣教団を組織して最初に活動したマケドニア州フィリピでの出来事を伝える説話物語の一部。前段（16:11～15）によれば、フィリピには会堂を維持できるようなユダヤ人コミュニティは存在しなかったが、少数のユダヤ人を対象として福音宣教し、裕福な女性商人リディアを含める信奉者を獲得している。同じ経緯で形成されたマケドニア州テサロニケの教会共同体と共に、フィリピの教会共同体は、その後のパウロの宣教活動を経済的にも支援し続ける特別な存在であったことが「パウロ書簡集」から示される。

・フィリピは、前 4 世紀にマケドニア王フィリッポス（アレクサンドロスの父）が鉱山開発および軍事拠点とする目的で創建した都市。ローマ支配時代、後に皇帝アウグストゥスとなるオクタヴィアヌスが政敵と戦った「フィリピの戦い」（前 42 年）以降、彼に従った退役軍人を入植させ、ローマ化が進められたとされる。日課箇所に登場してパウロを訴えた者らも「ローマ帝国の市民」（21 節）と自認。当時のローマ支配下の諸都市の中には、ユダヤ人が自由に移住できる居住区が設けられている場合もあったが、フィリピではそのような居住区は知られておらず、ユダヤ人コミュニティはほとんど成立していなかったと推認されている。

・16 節「祈りの場所」は、前段 13 節ですでに描かれているように、同地でユダヤ人会堂がなかったために、ユダヤ人らが任意に集まって安息日等の祈りを共同で行っていた場所。13 節では、この場所が「川岸」で見いだされており、野外の公共空間が「祈りの場所」として選ばれていたと推察される。そこで、この「祈りの場所」で為されていたパウロらの活動も、公衆の目に留まり、ここに登場する「占いの霊に取り憑かれている女奴隷」の発言に至った、ということなのだろう。

・16 節「占いの霊」は、ギリシア語「プネウマ・ピュトォーン」で、直訳すれば「ピュトンの霊」。「ピュトン」は、ギリシア神話で最重要の神託所デルポイを守護する蛇として登場し、神託者ともされていた存在。しかし、ゼウスの子アポロンの誕生に際して、その子の誕生によって自分が死ぬとの神託を受けたピュトンがその子の母を殺そうとしたため、アポロンは生まれたその日にピュトンを退治して殺し、デルポイの地に葬った。その後、巫女らはピュトンが地の底から吐き出す霊気によって神託を行うようになったとされる。日課箇所に描かれる「占いの霊に取り憑かれた女奴隷」は、このデルポイの巫女に類する者と推認される。ローマ人は、ギリシア神話をそのままではないが、神々の名を置き換えたローマ神話として受け入れていた。

・21 節「風習」は、ギリシア語「エトォース」、すなわち「エートス」。アリストテレス哲学の用語として知られるが、原義は「いつもの場所」で、一般に「習慣・特性・出発点」を指す用語として広く用いられている。

## 福音書日課（マルコ５章より）

・日課箇所は、主イエスが弟子たちと共にガリラヤ湖を渡ってカファルナウムの対岸にあるゲラサ人の地方で宣教活動をされたことを伝える説話箇所。共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）が共通して伝えている（マタイ 8:28 以下、ルカ 8:26 以下）。ただし、「マタイ」は、「マルコ」や「ルカ」と比べて大幅に簡略化して伝えている。

・「ゲラサ人の地方」は、ガリラヤ湖から南南東 60 キロほどの高原地帯にある都市「ゲラサ」（現在は「ジャラシャ」）を中心とした地方。当時、ガリラヤ湖から見て東部地域には、前 3 世紀以降、アレクサンドロス大王の後継者らによって建てられたり継承されたギリシア人植民都市が点在し、主要な 10（デカ）の都市（ポリス）を指して「デカポリス地方」（20 節）と呼ばれていた。「ゲラサ」は、その 10 都市の一つ。「マタイ」は、「ゲラサ」よりもガリラヤ湖に近い「デカポリス」の一つ「ガダラ」での出来事として伝えている。

・福音書で主イエスが異邦人の地で活動されたことを伝える伝承箇所は限られているが、この「ゲラサ人の地方」のほかは、フェニキアの「ティルスの地方」（マルコ 7:24 以下）が知られている。どちらの説話も、その地でユダヤ人と接触したことは伝えていないが、同時に異邦人宣教を積極的に為されていたとも言えない記述となっている。異邦人の地で身を縮めて生活していたユダヤ人の知人を訪ねた旅行だったのかもしれない。

・ここに登場する「汚れた霊に取りつかれた人」は、精神錯乱した狂人のように描かれているが、この説話全体にさまざまな象徴的な表象が用いられており、必ずしも文字通りのこととしてだけ解釈されるべきではないかもしれない。たとえば、この人に取りついている「汚れた霊」は自らを「レギオン」と名乗っているが、これは当時のローマ軍団の一個師団の名称。また、この「汚れた霊」が追い出されて乗り移った先である「豚」は、ユダヤ人が嫌悪し避けてきた動物である一方、ギリシア・ローマ文化の中では広く食肉として用いられてきた家畜。つまり、この人に取りついていた「汚れた霊」は、ローマ人やギリシア人の風習や文化を示唆しており、それらに汚染されながらもその縛りから逃れようともして苦悶している人物を、比喩的に描いているとも解釈し得る。

・7 節「いと高き神の子イエス」という呼称が用いられているが、「マルコ」においてイエスを「神の子」と呼ぶ例は限られており、標題（1:1）のほかは、この箇所と 3:11 の「汚れた霊」、また十字架刑を見届けたローマ兵の「百人隊長」（15:39）のみ。「汚れた霊」は、イエスを「神の聖者」（1:24）とも呼んでいる。「マルコ」は、標題にあるとおり主イエスが「神の子」であるという前提で叙述しながら、これを当然の呼称としてではなく、地上を歩まれた主イエスに従った弟子たちの視座からでは呼び得ない呼称として位置づけているのだろう。ただし、この呼称を神的な存在を指すために用いているわけでもなく、「百人隊長」に語らせているように、「十字架で死なれたキリスト」を指し示す呼称として位置づけようとしていると考えられる。

## 来週の誕生日 （6 月 14 日～20 日）

。

## 主日礼拝の讃美歌から

・21-353「父・子・聖霊の」（＝Ⅰ-70 番「父、み子、み霊の」）は、9 世紀スミルナの司教メトロファネスの作とされる讃美歌。曲は、ジュネーブ詩編歌から。

・21-54「聖霊みちびく神のことばは」（＝Ⅱ34）は、18 世紀英国の詩人・讃美歌作家ウィリアム・クーパーの作詞。クーパーは、牧師家庭に育ったが、成人して自殺を企てたことを機に、「くすしきみ恵み」の作者として知られる牧師ジョン・ニュートンのもとで詩作活動をするようになった。曲は、アイザック・ウォッツ作の讃美歌詞に付されていたものを転用。

・21-444「気づかせてください」は、『讃美歌 21』編纂に先立つ新作公募に応募・採用された日本人の作詞作曲の讃美歌。作詞の木原は国語科教諭を経て牧師になった。作曲の米野は鎌倉雪ノ下教会出身の音楽家でフィリピンの大学で教鞭をとっている。

*21-353「父・子・聖霊の」＝Ⅰ-70「父、み子、み霊の」*

### *Τριφεγγὴς* Μονὰς Θεαρχική

*English translation by Rev. John Mason Neale*

### *O Unity of Threefold Light*

1. O Unity of threefold light, / Send out Thy loveliest ray, / And scatter our transgressions' night, / And turn it into day; / Make us those temples pure and fair / Thy glory loveth well, / The spotless tabernacles, where / Thou may'st vouchsafe to dwell.
2. The glorious hosts of peerless might, / That ever see Thy face, / Thou mak'st the mirrors of Thy light, / The vessels of Thy grace. / Thou, when their wondrous strain they weave, / Hast pleasure in the lay: / Deign thus our praises to receive, / Albeit from lips of clay.
3. And yet Thyself they cannot know, / Nor pierce the veil of light / That hides Thee from the Thrones below, / As in profoundest night. / How then can mortal accents frame / Due tribute to their King? / Thou, only, while we praise Thy name, / Forgive us as we sing. Amen.

*21-54「聖霊みちびく神のことばは」*

### *The Spirit Breathes upon the Word*

1. The Spirit breathes upon the Word, / And brings the truth to sight; / Precepts and promises afford / A sanctifying light, A sanctifying light.
2. A glory gilds the sacred page, / Majestic, like the sun: / It gives a light to every age; / It gives, but borrows none, It gives, but borrows none.
3. The Hand that gave it still supplies / The gracious light and heat: / His truths upon the nations rise; / They rise, but never set, They rise, but never set.
4. Let everlasting thanks be thine / For such a bright display / As makes a world of darkness shine / With beams of heav'nly day, With beams of heav'nly day.
5. My soul rejoices to pursue / The steps of him I love. / Till glory break upon my view / In brighter worlds above, In brighter worlds above.